

學大科法學大國帝都京

叢論濟經

號六第

卷二第

論說

●戰後ノ關稅團體ノ計畫
●生死減少逆行ノ法則

研究

●植民政策上ノ根本問題
●本多利明ノ經濟說(三完)

雜錄

●不換紙幣流通ノ根據ニ就テ
●在外正貨ノ處分ニ就テ
●數トリ切手貼用法
●全米貨幣統一案
●獨逸^{ニ於ケル}工場衛生問題ノ研究
●經濟雜話(三)
●再ビ本多利明ノ著書ニ就テ
●歐洲戰爭ノ經濟的說明
●戰時戰後ノ佛國物價
●香港政廳ト對獨貿易

法學博士 戸田 海市

講 師 高田 保馬

法學博士 神戶 正雄

講 師 本庄榮治郎

法學博士 戸田 海市

法學博士 神戶 正雄

教 授 財部 靜治

助教授 河田 嗣郎

助教授 山本美越乃

法學博士 田島 錦治

講 師 本庄榮治郎

法學博士 河上 肇

法學博士 小川郷太郎

法學博士 佐藤丑次郎

本多利明ノ經濟說 (三、完)

講師 本庄榮治郎

第四 帝國主義論

利明ハ蝦夷諸島ヲ開發スヘキコトヲ說ケルノミナラス、尙進ンデ領土ヲ擴張スヘシトシ一種ノ帝國主義的見解ヲ探レリ。シノ内容ハ三種ノ計畫ヨリ成レルカ如シ。即チ其一ハかむさすかニ關シ其二ハ唐太山丹滿州ニ關シ、其三ハ亞米利加ニ關スルモノ是レ也。先ツかむさすかニ就テ論スル所ヲ見ルニ同島ハ往古ハ其地ヨリ

『千餘夥ク出セシチ松前所在島へ運送シ米ト麴ト酒ト煙草ト小間物糸針類及刀物類銅等ト交易シテ世ヲ渡リシカ、享保ノ頃ヨリかむさすか邊へもすこひやノ官船涉海シもすこひやノ土産物ヲ運送シ交易セシヨリ日本ノ助ヲ得ス共、かむさすか立往ク様ニナリ赤蝦夷ヲ自然ト僭信シテもすこひへ從ヒタリ。是ヨリ漸々トかむさすか開ケ日本ヲ疎スル也。』(蝦夷土地開發事情カクノ如クナルカ故ニ同島ノ領有ヲ策セサル可ラス。即チ曰ク)

『大日本ノ國號チ東蝦夷ノ内かむさすかノ土地ニ遷シ、古日本國ト國號チ給リ假館チ居テ郡縣チ置、諸有司チ副、土人チ介抱サセシムベシ。唯今ノ法令ニ不相當ニテモ國ノ爲ニハ換ガタク當時もすこひやノ吏多ク渡來住居スルトモ是ニモ構ナク、元來日本ノ屬國ノ蝦夷土地ナレハ渠モ強テ彼是イフコトモナルマシ。』(西城物語)

次ニ唐太山丹滿州等ニツキイフ所ヲ見ルニ、

『日本ノ天下第一ノ最良國トナルヘキ所以ヲ論スレハ、神武以來凡一千五百歳ノ内漸々諸道モ具足セシニ乘ジ、かむさすかノ土

地ニ本都ヲ遷シ、西唐太島ニ大城郭ヲ建立シ山丹滿州ト交易シテ有無ヲ通シ殊ニ大人參ハ建州江寧府ノ產物ナレハ隣國ユヘ何程ニテモ下直ニ得テ國用ニ達シ交易ニ金銀ヲ用ス、品物トシノ遺取ナレバ多寡ハ入用ニ任スヘシ。……只今迄ハ山丹人毎年一次宛小舟ニテ二三艘宛唐太島ノ南緣ニ副、松前所在島ノ兩端セウヤトイフ所ヘ渡來シテ土人ト交易ナスルナリ。其品物ノ内、十德、青玉、其外ニ小間物類皆蝦夷ノ手道具トナル。日本ヨリ遣物ハ鍋及鐵類、海山獸ノ皮類ナリ。是ヲ因緣トシテ街道ヲ開クニ於テハ唐太島ノ繁昌ハ年ヲ待スニ隆ナリ、固ヨリ大國ナレバ日本ヨリモ眞國トナラン。〔西域物語〕

ト。而シテ樺太ニ於テハ往古ヨリ運上屋ナルモノアリ。運上屋トハ諸產物ヲ買集ムル商戸ヲ云フモノニシテ、蓋松前志摩守ニ運上ト唱ヘテ利潤ノ幾分ヲ納ルヲ以テ也。乃チ樺太ノ領有ニハ、コノ運上屋ヲ利用スヘシトテ曰ク、

『每夏商船渡來シテ土人ト交易スルコト凡百有餘年ニ及ヘリ。扱又此地ハ本邦ニ取テ人切ノ要地ナリ。依テ往古ヨリノ運上屋ヲ臺トシ段々運上屋ヲ潤飾シテ奥ノ地方ニ距ルヘシ。國界ノ心得ヲ以テ手ヲ引カヌ様ニ丹誠スレハ土人等モ尊服スレハ、からふさノ國產本邦ノ扶ケトナリ益トナルノミニ非ラス。大ナル要害ニナルナリ。〔自然治道之辯〕

ト。更ニ亞米利加ニ關スルモノハ、

『かむさすかト此土地(亞米利加)ニ大都會出來スレハ其勢ニ乘シ、かむさすかヨリ南洋ノ諸島モ獨開シテ各繁昌ノ國々トナルニ從ヒ、東部ノ御威光モ隆ニナルヨリあめりか屬ノ島々マデモ猶屬シ從ン勢具足ノ日本島ナリ。日本ニ屬シ從フヘキ島々アリ。〔西域物語〕』
『江戸ヨリ寅卯ニ當リ渡海千四百七十五里ニシテはうくせんゼト云碑有、則北亞墨利加ノ土地ナリ北極高六十六度三十分、江戸ノ子午線ヨリ東方赤道經度四十九度十分ニ處在セリ。土人毛髮黑シ、黧黑ク中脊ニシテ我國ノ人物ト異ナル事ナシトイヘリ。然レトモ未タ人ノ道ヲ得サル土人ニシテ則蝦夷ノ土人ト等シ懷フニ東奥蝦夷かむさすかヨリ東方地懷たらいすノ碑ヨリ東方ヘ渡海凡百二十里斗ニシテ北亞墨利加ノ土地ナレハ往古ヨリ蝦夷ノ土人漸々傳移殖セシカ知レス。何レ我國ノ人物ト同種類ナレハ我國ヨリ撫育介抱シテ屬國トナスヘキ土地ナリ。』(贅說)

ト是レ蓋民族主義ノ思想ト見ルヘク、又若シ全日本主義(Pan-japanism)ナル運動アリトセハ、ソノ最モ早く提唱セラレタルモノトシテ之ヲ見ルヘキ也。

鎖國保守ノ當時ニアリテ此ノ如キ開國進取ノ説ヲナス、ソノ論議ヤヤ荒誕ニ失スルノ嫌ナキニ非スト雖、所論ノ根柢ニ横ハレル思想ニ就テハ注意スル所ナカル可ラス。然ラハソノ潜在思想トハ何ソヤ。曰ク經濟的發展ニ基ク領土ノ擴張是レ也。蓋領土ノ擴張ニハ單ニ爲政者ノ支配欲、政治欲ニ基クモノアリ。コノ場合ニ於テハ民衆ノ福利通商貿易ノ如キコトハ顧ミラルル處ナク、之ヲ威壓克服シ片務的義務ヲ負ハシムルヲ常トス。從テ土民反抗ヲ招キソノ統治頗ル困難ナルニ反シ、經濟的發展ニ立脚セル領土擴張主義ニアリテハ、通商ヲ重視シ民福ヲ考慮シ之ヲ制壓スルヨリハ寧ロ撫育同化セントシ融和包容ノ力頗ル大ナルモノアリ。通商貿易開發同化ヲ主義トセル利明ガ經濟的帝國主義ヲトレルハモトヨリ當然ノコトナリト雖、ソノ思想ノ高遠ナルニ驚カサルヲ得ズ。

第五 産業獎勵論

古來我國ハ農ヲ以テ國ヲ立テ、特ニ徳川時代ニアリテハソノ經濟ハ鎖國孤立的ノ狀態ニアリシカ故ニ、國民ノ食物ヲ生産スル農ヲ以テ國本トスルノ外ナク、當時一般ニ農本思想ノ強烈ナリシコトハ怪シムニ足ラサル所ニシテ、利明ノ如キモ亦農業ヲ重視セリ。曰ク

『農業ハ國ノ本ナレハ王侯トイヘトモ手自耕耘シテ農民困苦ノ百分之一ヲ知給ザレバ國家ノ大本タル政事ニ齟齬スルコト多ク況庶士ニ於テオヤ』(經世秘策後篇)ト。

而モ當時コノ農民ハソノ負擔ノ過重ナリシニ因リ甚タ疲弊シツツアリ。

『治平相繼程武家次第ニ増殖シ奢侈モ亦然リ。商民モ又其ノ如ク此兩民ノ増殖ノ勢ニツレ僧工遊民モ亦増殖スルニハ農一民ニテハ哺養ナリ兼テ道理ナリ。土工商遊民ノ國用不足トナルニハ農民ヲ虐ケンヨリ外ノ事アルマジ。於是農民困窮スルナリ。田畑ニ際限アリ、出產ノ米穀ニ亦際限アリ、年貢租税ニ亦際限アリ其殘リノ米穀モ亦際限アリ、其際限アル米穀ヲ以テ下萬民ノ食用ヲ達スルチ、土工商僧遊民日ヲ追、月ヲ追、増殖スルニハ國用不足トナル。於是無是非モ猾吏ヲ選舉シテ農民ヲ責メ愚ルヨリ外ノ所業ナシ。終ニ過租稅ヲ取、課役ヲ掛ルニ至ルナリ。於是農民堪兼木手餘地ト名ケ其田畑トシレド、亡處ト爲テ租稅ノ減納ヲ謀ルナリ』(西域物語)

而シテ當時年貢ノ收納ニハ關東方面ニ於テ檢見ノ法行ハレタルカ爲メ

『耕耘ヨクシテ豐作スルトイヘドモ檢見ノ節耨長タル役人來テ惡檢見ナスルニハ田地ニ出來ノ限ハ皆取詰ルナリ必竟耕耘能、苗十分ニシテ豐作スルハ大損ナリ其年毎ニ苗代程宛餘慶ニ損アリ夫ヨリハ出來次第荒シ作ノ方便利多シトイヘリ』(西域物語)又曰ク『龜東ノ諸國ハ色取檢見ノ取箇ニテ豐作スレバ豐作ニ相應シ多クトラレン意ノ曲アリテ苗不足シ耕耘疎妄ナリ。是ヲ名テ荒シ作リト云』(蝦夷道知邊)

カクノ如ク掠奪農業行ハレテ生産益減少シ、食料減少シテ國民愈萎靡ス。爰ニ於テカ産業ノ開發、國產ノ増殖ヲ策セサル可ラス。即チ曰ク

『農業ノ道ヲ以テ國政ノ最初トシ勸農ハ官ヲ立撫育教導ニ丹誠スレハ永久亡慮ノ出來スルコトナシ。』(自然治道之辯)

而シテ謂フ所ノ産業ノ範圍ハ必スシモ農耕ノミニ限ラス工業製品ニツイテモ獎勵ノ意ヲ明ニセリ。曰ク、

『常ニ布帛器材ヲ檢査アリテ鹿密精拙ノ階級ヲ分別シ、中ニモ長シタルヲ賞シ短ナルヲ助ル策アラバ、珍産珍器日ヲ追テ善美ヲ勉メ能技ニ達スルモノモ亦多ク出來シテ國ニ妙産多ク出來、國ノ光輝ヲ副ン。左アラバ異國ヨリモ譽ヲ取シユトナ謀ルハ國務ニテ、ヒデ叶ハメ道ナリ』(西域物語)

カクノ如キ國產獎勵ノ思想ハ利明ノ獨リ有スル所ニハアラス。當時ノ經濟學者多クコノ點ニ留意

シ各地ニオケル特産物ノ發達、富源ノ開發ヲ論シタルコト少カラス、然レトモソノ多クハ國內の見地ヨリ立論セルモノナレトモ、利明ノ論セル所ハ更ニ一步ヲ進メテ貿易關係ニ注目シ輸出ノ獎勵ニ資スヘシトセル點ニ於テソノ思想ノ凡俗ヲ超越セルヲ見ル也。コノコトハサキニ外國貿易論ニ於テモ略説シタル所ナルガ、尙『蝦夷道知邊』ニ讒ケル所ヲ掲ケテソノ旨意ヲ明カニセントス。

『治平ニ當リテハ是非トモニ開業ヲ以テ國裕ノ天賦トセン事ハ萬民ニ受母タル所以ナリ。因テ懈怠ナラサル國務トスヘシ。左ナケレハ追々増殖スル人民産業ニ不足出來自然ト食糧似シクナリテ終ニ開引子スルノ母癩發起シ、甚シキニ至レハ人民不足トナリ、真田如ハ廢シ手餘地ト名ケ則亡所ナリ。追々亡所ヲ増殖シテ國產減少シ諸色高價トナリ産業勝劣出來終ニ人民ヲ損亡スルニ至ルナリ。既ニ天明癸卯以來凶歲不熟打續キ丙午ニ距リ奥羽大ニ飢饉シ兩國ニテ凡二百萬人餘ノ餓死ニ及ヒ亡所夥シク中國ニモ及ヒタリトイヘリ。……此道理アルヲ以テ開業ヲ治平ノ國務トスルナリ。左スレハ人民ノ産業ニ不足セス食糧ニ乏キ事モナク道ヲ増殖シテ日本周廻ノ島々迄ヘモ滿テ産業ニ丹誠スル故島々ヨリモ金銀銅鐵及百穀百菓珍產迄モ出產シ悉ク皆日本ヘ持込様ニナリ行キ國家ニ豐饒ヲ副ルナリ。夫ニテモ固ヨリ際限アル島々ナレハ終ニ又産業不足シ食糧匱乏シカルヘキ道理有故又此ヲ遑々慮リ海國ニ備フヘキ渡海ノ法ヲ備置ハ人民ノ増殖ニ隨ヒ遠海ヘモ涉渡リ遠國ノ國產迄モ持込様ニナリユケハ永久食糧ノ乏キ事モ無、増殖ノ殖勢モ折ク事モ無、豐饒ノ末ヲ逐ルナリ』ト。

卒然トシテコノ一文ヲ讀マハ産業開發ト航海業ノ發達トノ間ニハ未タ密接離ル可ラサルノ關係ナキカ如クナレトモ、航海ノ發達ガ外國貿易ノ隆昌ヲ期シ、而モ貿易ヲナスカ爲メニハ自國ノ產物ナカル可ラストノ思想（前掲外國貿易ノ條參照）ヨリスレハ這問ノ關係ハ自ラ明カナルモノアラン。

尙一言附加スヘキコトハ利明ノ農本思想コレナリ。既ニ述ヘタルカ如ク利明カ農業ヲ國ノ本ナリトシコレヲ重視セルコトハ明カナル處ナレトモ、他方ニ於テ外國貿易ヲ主張シコノ點ニ於テ商工ノ意義ヲ認ムル以上ハ、一派ノ學者例ヘハ徂徠ガ

『武家ト百姓トハ田地ヨリ外ノ渡世ハ無テ常住ノ者ナレハ只武家ト百姓ノ常住ニ宜シキ様ニスルヲ治ノ根本トスヘシ。商人ハ不

定ナル渡世ナスル者故、善惡右ニ云カ如シ、然レハ商人ノ潰ルルコトヲハ嘗テ構間敷也、是又治道ノ大割ノ心得也ト可知(政談)トイヘルカ如キ極端ナル農本主義ニ非ルコトヲ知ルヘキ也。只當時ニ於テハ事實上產業ハ農本ノ狀態ニ在リシヲ以テ他ノ二業ニ比シテ農ヲ重要視セシニ過キサル可シ。

第六 社會階級間ノ關係

徳川時代ニ於ケル社會階級トシテ士農工商ノ四者ヲ數フルコト通常ナルガ、其中士農階級ト工商階級トハ利害ノ相一致セサルモノ多ク、殊ニ武士階級ハ當時政治上ノ權力ヲ有シ工商階級ヲ蔑視シタルコト少カラスト雖、商人階級ハ既ニ全國ノ金權ヲ掌握シ隱然一大勢力ヲナシ、武士ノ如キモ之ニ資給ヲ仰ケルコト少カラサリシ也。自然治道之辯ニ

『今既ニ天下ノ諸侯至極ノ困窮ニ及タリ、依テ商ノ仕送ヲ請ヒ今日ノ凌キスルチ耻辱トモセス、二百六十餘侯ノ内自立ノ侯ハ稀ニテ餘ハ皆借財ノ淵ニ沈ミ、子々孫々浮ム瀬更ニナシ……皆々簡牘ノ身上ニモアルマシケレトモ大概、困窮故商ニ所領ヲ渡切、仕送リヲ請テ商ノ手盛ヲ給ヘ公私ノ用ヲ達スルナリ。天下ノ諸侯永ク商ニ所領ヲ奪レタルニ異ルナシ。苦々數コトニ非スヤ』

トイヘルハ蓋這間ノ消息ヲ傳フル者也。然ラハ士農工商間ニ於ケル富ノ分配狀態ハ如何。天下ノ國產凡十六分ニシテ其十五ハ商ノ收納、其一ハ士農二民ノ收納ナリトスルコト利明ノ屢々說ケル所也(西城物語、經世秘策、長)。今ソノ經世秘策ニ論スル所ヲ舉クレハ左ノ如シ。

『天下ノ通用金銀ハミナ商賈ノ手ニ渡リ聚富ノ名ハ商賈ニノミアリテ、永祿ノ長者タル武家ハ皆貧窮ナリ。故ニ商賈ノ勢ヒ追々盛ニシテ四民ノ上ニ出タリ。愚愛ニ當時商賈ノ收納ヲ探索スルニ日本國ヲ十六分ニシテ其十五ハ商賈ノ收納、其一ハ武家ノ收納トセリ。其證據羽州米澤及ヒ秋田仙北郡邊ノ米豐作ノ節ハ一升代錢五六文ナリ、交易ノ上商賈ノ手ニ渡リ江戸ニ到レハ豐凶

ノ差別ナク凡百文トナル。此割合ヲ以金一萬兩ヲ元入トナシ羽州ノ米ヲ買入レ江戸廻シ、賣拂ヒ高金十六萬兩ト成ル、又此十六萬兩ヲ以元入金トナシ同國ノ賣米江戸廻シ賣拂高二百五十六萬兩トナル。二次折返シ交易スレバ此ノ如ク大金トナル。此内運貨駄賃モ掛ルトイヘドモ、一次ノ買米元金ノ十六倍トナル。爰ヲ以見レハ天下ヲ十六分ニシテ其十五ハ商賈ノ收納其一ハ武家ノ收納タルコト瞭然ナリ。農民一夫ノ產業ヲ以イヘバ一ヶ月三十日ノ内二十八日ハ商賈ニ二日ハ武家ニ………奉公スル割合ナレバ凶歲饑饉到來スルトモ、武家ニ附ナケレバ救ヒ助ルコト成難ク見殺シニスルモ理リナレドモ、立ベキ制度モ立サルユヘ其過失農民責ヒテ餓死スルトハ窪所ニ水溜ル謠ノ如ク不便ト云モ餘リアリ。』

此ノ如ク富ノ分配不均衡ニ失スルカ故ニ『四民ノ鈞合ヲ取直ス事ハ治道第一ノ要務ナリ』(自然治道之辯)。然ルニ爲政者ハコノ要務ヲ等閑ニ附シ却テソノ國用ノ不足ヲ農民ヲ壓迫スルコトニヨリテ補償セントシ『胡麻ノ油ト百姓ハ絞レハ絞ルホド出ルモノナリ』(西域物語)トテ誅求ヲ是レ事トス。カクテ農民ハ益疲弊シソノ負擔ノ重キニ堪ヘス、遂ニ離散逃亡シテ各地ニ亡所出來シ富源ハ委棄セラレ、產物生セス國力ノ衰亡ヲ惹起セントス。即チ曰ク

『今既ニ國用不足ナルカ故ニ農民ヲ責虐租稅ヲ取増サン策アレトモ、其度不叶シテ却テ降減セリ。於是益虐政募ルニ於テハ終ニ農民皆退轉斷絶セン勢ハ正ニ唯今ノ風情ナリ。然ハ今爰ニ遠キ慮ナキ時ハ必ス近キ災害并ヒ至ルヘシ。收納ノ厚薄ハ國力ノ強弱ニ係レハ暫時モ懈怠ナク、丹誠スヘキハ國務ノ恒憲ナリ。國ヲ治ルノ天職ナリ』(自然治道之辯)

ト而モ士農ノ困窮、租稅誅求ノ源淵ハ『渡海運送交易ヲ商民ニノミ任セアル過失ヨリ出來セリ』

(經世秘策)トテ救濟策トシテハ新田開發等ノ方法モ頗ル必要ナルコトナレドモ、之レト共ニ根本的ニ海運官營ヲ行ヒ以テ貨物ノ交易ヲ圓滑ニシ、物價ノ調節ヲ計リ、租稅誅求ノ必要ナカラシメバ農民撫育ノ途ニ副ヒ、國產大ニ興リ農民モソノ堵ニ安ンスルニ至ラント説ケリ。

人或ハ右ノ救濟策ヲ以テ頗ル間接的ナリトシ租稅負擔ノ輕減、新田開發、副業獎勵其他ノ方法

ニヨリ直接ニ農民ノ疲弊ヲ救ヒ以テ四民間ニオケル不權衡ヲ矯正スヘシトイフ者アランモ、利明ノ論スル所ハ更ニ高遠ニシテコレ等ノ枝葉問題ヲ顧ズ、ソノ根本ニ向テ改善ヲ加ヘントセルモノ也。抑經濟振興ノ基本ハ交通政策ニ待ツ、土地山林ノ富源開發ノ如キモソノ根本ハ交通ノ完備ニ在リ。當時交通ノ不便ナルカ爲メ都會ニオケル價格ハ地方ニ比シテ十六倍シ地方農民ハ僅カニ消費地價格ノ十六分ノ一ヲ得ルニ過キス、カクノ如キ狀態ノ下ニアリテハ奸商ヲシテソノ利ヲ專ニセシムルノ弊甚ダ大ナルモノアルカ故ニ、之ヲ矯正シテ地方ニ於テモ相當ノ價格ヲ維持セシメ地方民ヲ富マシムルカ爲メニハ先ツ交通ノ發達ニ留意セサル可ラス。蓋交通ノ發達ハ貨物ノ地方的分配ヲ調節シ從テ物價ヲ平準ニシ、ソノ結果トシテ生活ノ安固ヲ増スニ至ルモノナリ。海運業ニアリテモ亦然リトス。今江戸ニ輸送セラルル米穀ニツイテ之ヲ見ルニ海運業發達シテ敏速且安全ニ之ヲ輸送シ得ルニ主ラハ從來行ハレタル廻漕中ノ不正行爲、又ハ破船等ニヨル江戸輸入量ノ絶對的減少ヲ防止シ得ルノミナラス、附近各地方ニ於ケル年々ノ豐凶ニ影響セラルル程度モ小トナリ、ソノ價格モ從テ平準シ、國用ノ上ニ於テモ士民ノ生活上ニ於テモ大ナル變動ナク、從來ノ如ク奸商獨リ利ヲ占メ農民ハ常ニ國用不足ノ影響ヲ受ケテ租税ノ過重ニ泣クカ如キ弊ヲ救フコトヲ得ヘキ也。是レ利明カ航海業ノ發達ヲ以テ農民救濟策トナセル所以也。

第七 人口論

一國人口ノ多少ハ政治上經濟上社會上影響スル所少カラス、從テソノ増減如何ハ亦重要ナル間

題ニ屬ス。利明曰ク

『先ツ當時ノ國益ヲ興創仕候ニハ其國其處ノ人民自他ノ多少マテナ心附不申候テハ成就難仕、若人民不足仕候テハ國益成就不住候、依之人民ヲ可殖殖候』(四大急務ニ關スル上書)

然ルニ當時東國方面ニハ殺兒ノ弊風行ハレ人口増加ニ對スル障害ヲナスモノ如シ。即チ曰ク

『人倫ノ本ハ夫婦ニ始ルト支那ノ古聖人イツカイハレタレドモ其語リノ教立サルユヘニ治平相續スレハ末ガ未程ツマリテ世ヲ送り兼ソコトヲ恐テ我子ヲ多ク持テハ其子ニ譲リアタフヘキ産業連モナク、ソダテオキ後年路途ニ立艱難サセシヨリ未生以前チ謀ルカ勝ナリ、喰ヒ潰シノ口ヲ殖サヌコソ追ナリト夫婦相談合體シテ出産ノ節竊ニ敷潰シ何カソシラヌ體ニスルチ名テ間引子トイフ。關東ヨリ奥羽ニ至ル十ヶ國ニ最多シトセリ』(西域物語)

尙人口増加ヲ阻障スル原因ニツキ利明ハ更ニ左ノ如キ事項ヲ擧ケタリ。

『一體近年農民漸々減少仕候者間道中筋之宿々或ハ城下或濠洲之賣女ハ停止被仰付可然奉存候婦女ハ男子ヲ出産仕候チ生涯ノ主役ト仕候者ニ御座候得ハ假如壹人之婦女ヲ相殿候モ惜敷者ニテ況夥數婦女ヲ相殿候儀ハ國民不足ノ時節ニテ増殖ノ思召ニ相背キ候ニ付追追停止被仰付可然奉存候』(前掲上書)

ソノ原因ノ何レニ存スルヤヲ問ハス農民其他ノ増加ヲ計ルカタメニハ先ツ應急策トシテ施米ノ法ヲ行フヘキコトヲ説ケリ。曰ク

『人民ヲ相殖候ニハ村名主ヲ以資民ノ婦女ノ懷孕ヲ相改出產月ヨリ出生ノ子ハ拾五歳マテハ母エ米ニ俵ツツモ毎年被下置候ハハ將來二十年計リニハ餘程農民出來可仕候』(前掲上書)

然レトモ之ノ方法ハ一ノ應急策トシテ提案セルモノナルヘク、人口増加ノ根本政策トシテハ産業ノ開發ヲ計リ人口ノ増加ニ伴フテ食物ノ供給量ヲ大ニシ『何程子孫アリテモ一人モ間引子セスニ養育スルトモ食糧ニ乏カラス、成長ノ後渡世産業ニ何ナリトモ支滞ナキ様』(西域物語)ニセサル可ラス。而モ人口ハ如何ナル程度ニ於テ増殖スヘキカ、又之レニ應シテ産業ヲ開發スルノ途ハ如何。

利明ハ一ノ假定ヲ立テテ曰ク、

『一、夫年十五歳、婦年十三歳、初テ一子ヲ産ム。是ヨリ隔年ニ子ヲ産デ經歷三十三年ノ間ニ婦ノ血氣既ニ衰ヘテ子ヲ産マズ。

其子男女十七人アルヲ男子ハ婦ヲ他ヨリ招入テ一家トナシ、女子ハ夫ヲ他ヨリ招入テ一家トナシ、家數十七戸トナル。内惣領家ノ夫婦モ、又夫十五歳婦十三歳ヨリ隔年ニ孫ヲ産デ男女九人トナル、第二家モ其如ク孫男女八人、第三家モ其如ク孫男女七人、第四家モ其如ク孫男女六人、第五家モ其如ク孫男女五人、第六家モ其如ク孫男女四人、第七家モ其如ク孫男女三人、第八家モ其如ク孫男女二人、第九家ハ今年夫十五歳、婦十三歳ニシテ初メテ一孫ヲ生ム。父年四十八歳、母年四十六歳、子男女十七人ヲ産ム。其子他ヨリ連合ノ男女十七人ヲ招入テ、孫男女四十五人ヲ産ム。自他ノ父母四人ニテ産殖ス。

一、父母二家ニテ四人、父年四十八歳、母年四十六歳、元入人ナリ。

一、子男女三十四人、内長子年三十三歳、末子年一歳ナリ。

一、孫男女四十五人、内長孫年十八歳、末孫年一歳ナリ。

一、彥男女七八人アラシナレド、是ヲ算セズ。

子孫總計七十九人、二夫婦四人ニテ産殖ス所ナリ。是ヲ父母ノ四人ニ除テ十九人七分五厘ヲ得。三十三年ノ間ニ一人ニテ産殖ス。定則ハ上天子下庶人ニ至ルマデ各是ヲ含デ人涯ヲ僞者ナレハ政事善、各産業ニ行支ナキ様ニ介抱シ養育スルニ於テハ、三十三年ノ内ニ日本ヲ十九倍七分五厘押廣サレバ産業不足スルハ道理ナリ。勿論日本ノ内ニモ空山曠野マデモ新田畑ニ開發セシカナレドモ、今アル所ノ十九倍七分五厘ハ如何アルベキカ、ヨシアルニモセヨ、夫迄ニ至ル難邊食用ニ差支ルコトアレバ丈夫ニハナシ。自國ノ力ヲ以、自國ノ養育ヲセントスレハ常ニ不足。強テセントスレバ國民疲テ廢業ノ國民出來シテ大業ヲ破ルニ至ル。爰ヲ以、他國ノ力ヲ容ズシテハ何一ツ成就スルコトナシ。他國ノ力ヲ容ントスレバ海洋ヲ涉渡セザレバ他國ヘ到ルコト難シ。海洋ヲ涉渡スルニハ天文、地理、渡海ノ法ニ暗クテハ海洋ヲ涉渡スルコトナラズ』云々(西域物語)

ト説キ以テ人口問題食物問題ヲ解決スルノ根本策ハ開國貿易又ハ屬島開發ニ存スルコトヲ明カニセリ。

利明ノ人口論ナルモノハ必スシモ人口ソノモノノミヲ論シタルニアラス、農民疲弊ノ救済、開國進取ノ精神ト相關連シテ之ヲ説キシモノナリ、從テ思想ノ根本ハ悲觀ニアラスシテ發展ニ在リ。

發展ノ爲メニハ人口ノ多キコトヲ必要トス。故ニ如何ニセハ人口増加ノ目的ヲ達シ得ヘキヤト云フコト是レ人口論ノ出發點ナル可シ。タダ人口ト食物トノ關係ニ就テハ精密ナラスト雖、當時ノ狀態ニテハ食物増加率ハ人口増加率ニ及ハサルコトヲ認メ、之ニ處スルカ爲メ産業ノ開發、貿易ノ發展ヲ計リテ増殖スル人口ヲ維持シ、墮胎殺兒等ノ方法ニヨリテ人口制限ヲ行ハストモ優ニ之ヲ養育シ得ルタケノ物資ヲ供給シ、從テ人民ノ生活ヲ豊ニセサル可ラサルコトヲ説キシモノ也。

(註) Malthus が An Essay on the Principle of Population etc. 初版ナ公ニシタルハ一七九八年ニシテ、利明カ右ノ所論ヲ戰セタル西域物語ハ寛政十年(一七九八年)ノ著ニ係ル、亦奇ナラズヤ。

第八 物 價 論

物價論ハ徳川時代經濟學者ノ屢論議セル所ニシテ、ソノ騰落ノ原因ハ主要ナル問題ナリキ。而シテ利明ノ論スル所亦之レト關連スル所少カラサルガ、ソノ主要ナル論點ハ(一)物價ト貨幣數量トノ關係、(二)物價ノ變動ヲ調節スルノ必要ノ二者是レ也。先ツ第一ノ問題ニツキテ之レヲ見ルニ、『若過テ際限ナク(通貨チ)放チ與ユル時ハ諸色高直ニナリテ金銀ノ位チ身下スルモノ也。通用金銀ノ位漸ク身下スルハ國產ノ出來高ト通用金銀ト其多少不鈞合トナル故ナリ。當時ハ殊ニ農民減少シテ國產出高追年不足トナルニ通用金銀ハ前々ヨリ融通シテ不朽ノ上ヘ、猶追々放チ與ユルユヘ、益諸色高直トナルナリ。』(經世秘策)

次ニ第二ノ問題ニツイテ述ブル所ヲ見ルニ、

『夫通用金銀ハ國產融通ノ爲メニ製作セシ者ナレバ、多カラズ少ナカラズ中分ナル所ニ際限チ立、諸物ノ價餘リニ高直ナラバ通用金銀ノ多キヲ知ツテ引揚又餘リニ下直ナラバ通用金銀ノ少ナキヲ知テ放チアタヘ、諸色ノ價チ天下平均サセシム。通用金銀ノ多少差引ハ國家第一ノ政務ニシテ常ニ密々差引セザレバ庶民ノ産業ニ勝劣出來悵憤怒ノ遺念ヲ蘊積シ、終ニ利罰ノ罪人多

クナリテ國民ヲ失フコトモ多キニ至ルモノナリ。因テ通用金銀ノ多少差引程大切ナル政務ハナシ〔西域物語〕

カクノ如ク利明ハ貨幣ヲ以テ融通ノ具ナリトシ、其價值ハ貨物トノ比例ニ由リテ左右セラルルモノナルヲ説キ、一派ノ學者ノ信スルカ如ク固定不動ノモノニシテ且貨幣ノ存在量多ケレハ多キ程國富ヲ増進スルモノナリトイヘルカ如キ思想ヲ脱却セルヲ見ル可キ也。

(註) 貨幣數量ト物價トノ關係ニツイテハ既ニ室鳩巢ハ兼山秘策ニ於テ『金銀ノ數多ク成リ候事』ヲ以テ物價騰貴ノ一因トシ(日本經濟叢書第二卷二二〇頁)、三浦梅園モ價原ニ於テ『金銀多ケレバ物價貴シ、金銀少ケレハ物價賤シ』(同叢書第十一卷四一七頁)ト論シタルガ、梅園ノ如キハ特ニ此點ニツキ卓越セル意見ヲ有シタリキ。煩キ厭ハズソノ二三ヲ引用センカ、曰ク『譬バココニ一島アリ土地人民足り米粟、布帛、魚鹽他島ヲ假ラズ、一切事足り唯金銀ノミ無ランニ民粟ヲ以器械庸作ニ易テ金銀ノ貴チモシラデ立タザルコトヤハアルベキ、追々ニ錢一萬ヲ入テ他ノ用ヲ通セシニ一萬ノ錢其ノ島ノ用ヲ足サシムベシ、是ヨリ増テ十萬ニ至ラバ十萬ノ錢其ノ島ノ用ト、ツリ合ナシテ一萬ノ錢決シテ一島ノ用ヲ辨ゼズ。其初ハ島ノ諸用一萬ノ錢トツリ合ナシ米一石五百錢ニアタラバ其五百錢ヲ以一奴ヲ買フベシ、又入テ十萬ニ至ル日ハ一石ノ米五千錢ニテツリ合フベシ此時五百ノ錢纔數十日ノ人ヲ雇フニ過ジ。然ラバ前ノ五百錢モアルト後ノ五千錢セアルト數一倍スレドモ用ハ異ナルコトナシ。』又曰ク『一通リニ考フレバ金銀少ナケレバ世ノ中貧シク、金銀多ケレバ世ノ中ニタカナル者カト思ヘドモ、然ニアラズ。』或ハ曰ク『金アレバ成ザルコトナシト金ヲ挽ヅ心ハ吾儕小人一身ノ安否ノ計ニシテ、天下國家ヲ有スル人ノ悦ヒトスルコトニアラズ。金銀ノ通用ハ天地ヨリシテ觀ル時ハ左ノ物ヲ右ニ移シ右ノ物ヲ左ニ移スニ過ギズシテ布粟器械昨日迄ナキモノノ今日ハ天地ノ間ニ出衆テ、造化ノ功ヲタスケ飢渴ヲ愈ヤシ、寒暑ヲ禦クノ功ニ何ゾダグラブベキ。』云々

次ニ利明ガ物價ノ絶エス變動スルコトノ有害ナルヲ認メ之ヲ平靜ナラシムルノ必要ヲ説キ、通貨ノ伸縮ニヨリテ物價ヲ調節スヘシトシ、而モ之ヲ以テ重要ナル國務ノ一二數ヘタルハ利明ノ卓見ニシテ、梅園ノ如キモ前述ノ如ク物價ト貨幣數量トノ關係ヲ認メタルニ拘ハラス之ニヨリテ物價ヲ調節スヘシトノ論ニハ及ハサリシ也。要スルニ利明ガ正當ニ貨幣ノ本質ヲ了解シシノ作用ヲ説

キ、進歩セル現時ノ學說ト相去ルコト遠カラサル意見ヲ立テシコトハ敬服ノ外ナキ所也。

第九 米 價 論

先ヅ米價ノ重要ナルコトヲ論シテ曰ク

『夫米直段ハ諸穀ノ直段ノ兄ニテ一切ノ食物ノ直段ニ響キ米直段高下ニ依テ又高下ヲナスモノニテ大切ノ直段ナレハ商賈ノ預ルヘキニアラス。國君ノ天職ニ係レハ是非有司アツテ司サトルヘキハ米直場ナリ』(經世秘策)

ト。然ルニ米ノ生産ハ自然ノ狀況ニ待ツコト多ク、年ニヨリ或ハ豐熟シ或ハ凶作トナル。然レドモ

『日本ハ未申ノ隅ヨリ北緯ノ限ハ凡十度餘里程五六百里ニ所在シテ細長キ國ナレバ水旱風損杯アリテモ國中殘ル所ナク不熟スルコトハ古今ナキコトナレバ、豐作ノ國ヨリ凶作ノ國へ渡海運送交易シテ有無ヲ通シ萬民ノ饑饉ヲ救給ハハ國君ノ萬民ニ父母タル天職ニシテ是非トモセデ叶ハヌコトナリ』(經世秘策)

茲ニ於テカ交易ニハ『國君ノ天職ト商賈ノ產業』トノ區別アリ。

『商賈ノ所爲ハ其國其處ノ產物ヲ旬能キ時ニ下直ニ買得テ貯ヘ置、水旱風損杯異變ヲ待居テ是カ爲ニ相場引揚ケ高直トナル時、則其國其處へ元直段ヨリ數倍高直ニ賣テ高利ヲ貪ルヲ民ト利ヲ爭フト云テ君子ノ決テセサル所ナリ』(經世秘策)

カクノ如キ私利ヲ避ケ萬民ヲシテ安堵セシムルタメ米價ヲ適當ニ調節スルコトハ國君ノ天職ニシテソノ方法トシテハ

『日本國中ノ津滸湊湊ノ要地要地ニ交易館ヲ建テ其國其處ノ年年ノ豐凶作ニ依テ自然ト獨リ立ノ相場ヲ以、其年十二月迄ノ内其國其所ニテワリ出ス所ノ米穀ヲ賣賣アリテ其館ニ貯ヘ置、日本國中ノ豐凶作ヲ検査アリテ廻船便宜ニテ早速知レ年年其國國ノ扶食入用ホトハ心當チナシ其館ニ殘シ置、其餘ハ館ノ船舶ヲ以、凶作ノ國へ運送アリテ飢饉ヲ補フナリ。御府内ヲ始メ諸國共ニ前年十二月迄ニ百姓ヨリ賣出シタル自然相場ヲ臺トナシ、是ヨリ高直下直共ニ一二割ノ内ハ館ヨリ交易ヲ發セス。若コレヨリ高直トナラハ館ヨリ拂ヒ出シ、若是ヨリ下直トナラハ館ヨリ買上ケ、年中ノ賣買ト前年ノ十二月迄ニ百姓ヨリ賣出シタル所ノ

自然相場ノ内外一二割ノ内ニ維持キ賣買スル様ニ交易館ヨリ差引介抱スレハ、御府内ノ米直段ヲ以、日本第一ノ高直段トシ、是ヨリ段々遠近ト渡海運送トノ差別ハアルヘキナレトモ、大率平均シテ萬民大ナル救ヲ蒙リ、就中農民養生ノ心地スヘシ『經世秘策』ニヨルハ、自然治道之辯ニモ同論アリ

カクノ如ク米價ヲ調節シテ萬民ノ困窮ヲ救フトキハ、カノ

『間引子』ノ惡俗モ自然ト獨リ停止トナリテ二十ヶ年ヲ歴スシテ其民増殖スルノミニ非ス。亡處トナリタル田畑モ漸々再ヒ開發シ、元ノ其田畑ニ立歸リ數百萬石ノ收納ヲ責メ騰ケスシテ大益ヲ得ル良策ニモ叶ヒ誠ニ治國平天下ノ政務トナリテ萬民心服スルノミニ非ス。彼ノ十六分ニシテ其十五ヲ得ル大利トナルナリ。其十五ヲ得ルト云ハ凡六十一ヶ國程ノ收納ニ當ルナリ『經世秘策』ト説キ以テ米價調節ハ農民救濟策トシテ闕却スヘカラサルコトヲ示セリ。

右ノ調節策ニ就テ考フルニ利明ハ先ツ第一ニ我國ノ地形カ細長ニシテ風土氣候ノ異レル土地ヲ含メルコトニ着眼シ一方ノ凶作ヲ他方ノ豐饒ニヨリテ相殺セントスル地方の平均策ヲ唱ヘタルハ適當ノ見解トイフヘク、利明カ交通政策ヲ重視シ之ヲ私人ニ放任セス國家自ラコレヲ行フヘシトイヘルコトノ益々意義アルヲ見ルナリ。尤地方的平均行ハルルトスルモ、尙年ニヨリテ供給量ニ増減ヲ生スルハ免レサル所ナレバ、ココニ於テカ第二ノ策トシテ時間的、平均法ヲトラサル可ラス。而シテソノ方策トシテ政府ノ買上賣拂ノ方法ニヨリシコトハ當時ノ經濟事情ヨリ見テ適當ノ處置トイフヘク、現今唱ヘタルルカ如キ資金政策ヲ行フヲ得サルハ勿論ナリ。而シテ右ノ如キ買上賣拂ノ方法ニヨルモ尙年ニヨリ一二割ノ差異ヲ生スヘキコトヲ認メ、ソレ以上ノ變動アリタル場合ニ始メテ調節策ヲ實行スベシトイヘルハ、蓋右ノ方法ト其効力トヲ合セ考ヘタル結果ナルヘク、ソノ識見ノ凡ナラサルヲ見ル也。而シテコノ調節策ニシテ實施セラレタル曉ニハ經濟界順調トナリ、國力發展ノ基礎タルヘキ人民モ亦從テ増殖スルニ至ルヘシト説キ、サキニ人口論ニ於テ

見タルカ如ク、人口ノ増加ヲ頗ル重要視シタルコトハ大ニ注意スヘキ點ナリトス。

第十餘論

利明ノ經濟說中重要ナルモノハ略ホ以上ノ如シ。ソノ識見ノ凡俗ヲ超脱セルコトハ既ニ明カラシ。而シテ以上ノ外尙幾多所論ノ頗ル奇警ナルモノアリ、必スシモ經濟學說トシテ見ルコトヲ得スト雖、今ソノ一二ヲ記シテ利明ノ經濟說ヲ窺フノ側面的資料ニ供セン。

(一) 國字問題(漢字排斥論)。今ヲ去ル約百二十年前、世ヲ舉ケテ鎖國ノ夢ヨリ醒メス、支那ノ文物ニ倣フヲ以テ能事畢レリトセル時代ニ當リテ漢字排斥ノ聲ヲ聞クハ痛快事ナラスヤ。曰ク『歐羅巴ニ眞行草ノ文字アリ哉ト問人ニ答ヘン。彼國ニ支那、日本ニイフ様ナル文字ニテハナシ、タダ二十五字アリテ是ニ眞草行ノ如キ體ヲ異ニシテ八體トナシ事ヲ記スニ足レリトス。日本ハ支那ノ癖ニ染テ物々事々ニツキ其文字ヲ用ルユヘニ字數多クナクレバ用ナナサズ。タトヘバ日本ニテ天トイヘハ一字ニテ彼國ニテハヘイめるト四字、地トイヘハ一字ニテ、あゝるト四字ニテ、一字ハ箇、四字ハ、迂ナル様ナレドモ支那ノ文字數萬アルヲ記憶セントセバ生涯ノ精神コレガ爲ニ盡ストモイカデ得ベケン、大ニ戾レリトイフベシ。タトヘ暗記スル人出來タリトモ國家ノ爲ニ益ヲ起ス事モアルマジ、爰ヲ知リテ彼國ニハ箇ヲ取タルナラン。文字ハ事ヲ記シ情ヲ述ルヲ旨トセバ數萬アル支那ノ字ヲ記憶センヨリ、我日本ノ假名ヲ用テ事ヲ記サバ大ニ便利ナラン。日本ノ大儒ノ名ヲ得シ人トイヘトモ一國ノ事ニモ、ログニ通ルハナシ。然ルニ彼國ニテハ博學トモ云ハレシ人ハ、外國三十餘國ノ辭ニ通ジ國情物産ニ迄モ明白ナリトイヘリ。是文字少シテ精力ミナコレニ用ユルユヘナルベシ。』サレバ『支那ノ國字ニ違シ博學ノ名ヲ得ンヨリハ、ヤハリ我日本ノ假名文字ヲ用テ其情味ヲ盡サンハ便利トモイフヘシ。』(西域物語)

利明ノ論愈出テテ愈奇ナリ。是レヲ我國近時ニオケル羅馬字論ト對照考察スル又興味ナシトセザル也。

(二) 非支那崇拜論。西域物語開卷第一頁ニ曰ク

『我邦ノ人西域ノスル事モ辨ナク和闐陀國ハ畜生國ナリ』

ト罵リテ而モソノ真相ヲ知ラス。是レ蓋我國ニアリテハ

『國初以來支那ノ書籍ノ外ニ書籍ナシ。是ヲ熟讀シ其ノ意味ヲ會得シテヨリ智見ヲ開キタル國風ナレハ、支那ノ外ニ國々ガアリ
テモ皆夷國ニシテ聖人ノ道アルマジク、聖人ノ道ノ外ハ人ノ道ニ非ト一圖ニ凝固リタル風俗ナレバ、外ニ大キル美事アリテモ
承引スル人鮮シ』

トイヒ、ソノ見聞ノ狹隘ニシテ而モ頑迷ナルヲ排シ、一大痛棒ヲ彼等ノ頭上ニ加ヘテ曰ク、

『日本ハ支那ヨリ見レハ大ニ譽レニテ神武以來皇孫ヲ失ズ、他國ノ爲ニ侵サレズ、ケ程目出度日本ノ風俗ナルヲ兎角ニ支那ノ風
俗ヲ規鑑トスルハ淺ハカナル次第ナリ』

トシ支那崇拜ノ非ナルコトヲ說ケリ。嗚呼カクノ如キ利明ノ說ヲ以テ尙『支那學說ノ奴隸』トシ
『支那學說ノ糟粕ヲ甜ルニ過キササルモノ』トシ徳川時代ノ經濟學說ハ何レモ皆支那思想ノ燒直シナ
リトイフハ果シテ正當ナリヤ否ヤ大ニ疑ナキ能ハサル也。

第四章 結 論

以上述フル所ノ利明ノ經濟的思想ヲ通觀シタル後、吾人ハ之ヲカノめるかんちりずむト對比ス
ルコトノ頗興味アルヲ覺ユ。重複スルノ嫌ナキニ非スト雖、ソノ主要ナル諸點ヲ比較シテ以テ本
稿ヲ終ラントス。

先ツ第一ニ注意スヘキハ所謂めるかんちりずむナルモノハ一個ノ系統ヲナセル學說ニ非スシ

テ、時ノ事情ニ應シ機ニ臨ミテ斷片的ノ唱道セラレタル時務論ニ過キサルコト是レ也。利明ノ説ク所モ亦コレト同シク當時ノ政治上社會上ノ個々ノ觀察意見ヲ述ヘタルモノニシテ秩序アリ系統アル經濟學說タルニハ非ル也。則チ知ル兩者共ニ時務ノ論義ナルコトヲ。是レ蓋兩者カソノ規ヲ同シクスルノ第一點トイフヘキ也。

更ニソノ思想ノ内容ニ立入りテ之ヲ考察セン乎。めるかんちりすむノ根本思想ガ不完全不統一ナル封建制度ヲ打破シテ中央集權の國家ヲ建設シ、國民經濟ノ確立ヲ計リ大ニ國ノ内外ニ發展セントスルニ在ルコトハ近時學者ノ齊シク認ムル所ニシテ、是レめるかんちりすむヲ以テ國家本位論ナリト稱セラルル所以也^(註一)。今驪テ利明ノ論ヲ見ルニ、或ハ海運ノ官營ヲ説キ或ハ開國貿易ノ必要ヲ高調シ、屬島ノ開發ヲ痛論セルカ如キ、何レモ進取發展ノ意氣盛ナルヲ窺フニ足ルミナラス、國家ノ力ヲ重視セルコト亦疑フノ餘地ナキモノノ如シ。例ヘハ海運官營論ガソノ當時ノ民力ヲ以テシテハ到底迅速ニ且ツ容易ニ航海業ノ發達ヲ期スル能ハザルガ故ニ類ク偉大ナル國家ノ力ニ依リテ之ガ發展ヲ期スヘシトイヘルカ如キ、又或ハ當時ニオケル鎖國保守ノ政策、偷安退嬰ノ政治ハ時勢ニ適應スル所以ニ非ス、宜シク國ヲ開キテ貿易ヲ盛ニシ屬島ノ開發ヲ計リ以テ我カ國富ヲ増進スルノ必要ナルコトヲ説ケルカ如キ、何レモソノ國家的發展思想ノ反映ニアラズヤ。カクノ如クめるかんちりすむノ思想ト利明ノ説ク所トハ進取發展、國家本位等ノ根本思想ニ於テ相合スル以上ハ、爾餘ノ問題ニ就テモソノ類似點ヲ見出スコト少カラサルハ寧ろ當然ノコトナラン。例ヘハ人口ノ多少ハ國富ノ増進ニ多大ノ關係ヲ有スルヲ以テ人口増殖ノ必要ナルコトヲ説

(註一) Schmoller, The Mercantile System and its Historical Significance. 1884. p. 50. et seq.
Haney, History of Economic Thought. 1911. p. 89-90.
Bücher, Die Entstehung der Volkswirtschaft. 7. Aufl. S. 136-17
Philippovich, Grudriss d. P. O. Bd. I. S. 55.

キシカ如キ^(註二)。又利明ガ『國ノ力ヲ厚クスルニハ兎角ニ外國ノ金銀銅ヲ採テ我國ヘ容ルニアリ』^(蝦夷土地開發 恩存之大概)トイヒ或ハ『萬國ヘ船舶ヲ遣リテ國用ノ要用タル產物及ヒ金銀銅ヲ拔キ取テ日本ヘ入レ國力ヲ厚クスヘキハ海國具足ノ仕方ナリ』^(經世經策)トイヘルコトモ、めるかんちりすどカ貿易平衡論ヲトキ輸出超過ヲ歡ヒ貴金屬ノ吸收ニ腐心シ^(註三) Thomas Mun ガ "All nations who have no mines of their own, are enriched with gold and silver by one and the same means." トイヘント異ル所ナキ也^(註四)。

然レトモ彼我ノ間、常ニ經濟事情ヲ同シクセズ、又ソノ思索感想ニ差異アリ。爰ヲ以テソノ所論大ニ異レル點ナキニアラス。試ニソノ一二ヲ擧ケンカ、めるかんちりすとニアリテハ、貨幣ヲ重視シ之ヲ以テ多々益々辨スルカ如キ觀念ヲ有シ^(註五)リト雖、利明ハ既ニ早ク此ノ如キ誤謬ヲ脱却シ、之ヲ以テ單ニ融通ノ具ナリトシ其價值ハ貨物トノ比例ニヨリテ定マルモノナルコトヲ説キシカ如キ、又尙者共ニ外國貿易ヲ重視シタリト雖、めるかんちりすとノ如キハ一國ノ利益ハ他國ノ損失ヲ來スモノナリト説キシ^(註六)ニ反シ、利明ハ既ニ外國貿易ガ兩當事國ヲ利スルモノナルコトヲ道破セシカ如キ、又彼我共ニ外國貿易ヲ獎勵スル以上ハ商業ナルモノヲ重視セルコトハ既ニ明カナルガ、殊ニめるかんちりすとニアリテハ如上ノ貨幣ニ對スル迷信ヨリシテ貿易ヲ一層重視シ商業ヲ以テ農工以上ニ過重視シタリト雖^(註七)、利明ハ尙農業ヲ重視スルコト最モ強カリキ、是レ當時我國ニ於テハ尙事實上農業ガ重要ナル地位ヲ占メシニヨルヘク、彼我經濟事情ノ差異ヨリシテコノ相違ヲ生シタルモノナレトモ、尙利明ガめるかんちりすとノ如キ貨幣ニ對スル謬見ヲ

(註二) Leser, "Merkantilsystem" im Handw. d. Staatsw. Bd. VI. S. 651.

(註三) Leser, S. 651. Haney, p. 94.

(註四) Haney, p. 91.

(註五) Leser, S. 651.

(註六) Haney, p. 94. 107

(註七) Haney, p. 104. 107.

有セサリシニモヨルヘシ。此ノ如ク利明ガ農ヲ重視スルコトハ外國貿易論ノ結局ノ目的ニ就テモ窺フコトヲ得ヘシ、即チ彼ノ説ニヨレハ外國貿易ニヨリテ我國産業ノ開發ヲ計ル所以ハ、結局ハ食物問題ノ解決ニ資センカ爲メニ外ナラサル也。

斯クテ利明ノ經濟說ヲ概觀スルニ、其所論多クめるかんちりすとノイフ所ニ類スト雖、更ニソレ以上ノ卓説亦少カラズ。是レ豈驚嘆スヘキ事實ニ非スヤ。

然ラハカクノ如キ思想ハ果シテ利明ノ獨立セル思索ニ基ケルモノナリヤ、或ハ他ノ學說ニ淵源スル所ノモノナリヤ、之ヲ判別シ明確ナラシムルコトハ頗ル困難ナル問題ナレドモ、利明ノ説ヲ以テ全然孤立的獨創的思想ナリトハ信ジ得サルノミナラズ、又支那學說ノ燒直ナリトモ認ムルコトヲ得サル也。モトヨリ余輩ハ我國古來ノ文化ガ支那ニ負フ所多ク、殊ニ德川時代ニ於テ漢籍ノ一般ニ行ハレタル上ヨリ見テ、支那思想ノ影響ヲ否認スルノ妄斷ニ陷ルモノニ非スト雖、利明ノ云フ所ニ就テハ支那思想ノ外ニ尙洋學ノ影響ヲ受クルコト甚タ大ナルモノアルヲ認メント欲スルモノ也。

既ニ述ヘタルカ如ク利明ハ蘭學者也。而モ專ラ語學ノ研究ヲ目的トセルニ非スシテ蘭書ノ閱讀思想ノ玩味ニ力メタルノ士也。殊ニ當時長崎ニ於テハ蘭人ノ通商來航スルアリテ貧弱ナカラモコノ方面ヨリ外國ノ事情ヲ知り、又吉宗以後洋書輸入ノ禁弛ミシ事情ヨリ考フルモ、洋學思想ノ影響ヲ認メ得ヘク、又事實上ニ於テモ西葡蘭英諸國カ遠ク東洋ニ航シテ互利ヲ占メツツアルヲ見テ痛切ニ開國貿易ノ必要ヲ感シタルコトモアリシナラン。利明カ當時我國ノ貿易方法ニ缺點ノ少カ

ラサルコトヲ説キ、且歐洲諸國カソノ富強ヲ致シタル所以ハ外國貿易ニ存スル旨ヲ説ケルカ如キハ蓋コノ點ヲ暗示スルモノトイフベシ。

次ニ考フヘキコトハ利明ハ主トシテ如何ナル種類ノ蘭書ヲ閱讀シタリヤトイフコト是レ也。文典乎、醫書乎。然ラス。ソノ多クハ航海、天文、曆數、政治、地理ニ關スルノ書是レ也。(コノコトハ後ニ説明スル所ニヨリ)而シテ是等ノ書籍ガ交通貿易等ノ經濟問題ニ重大ナル關係ヲ有スルコトハ絮説ヲ要セサル處ニシテ、殊ニ利明カ渡海、運送、交易ノコトヲ力説セル點ト考合セハ頗ル興味アルヲ覺ユ。利明ノ著書ヲ通讀セシモノハ、必スヤ支那崇拜ヲ非トシ却テ西洋ノ事情ヲ詳説シ之ヲ尊重セルカ如キ口吻ノ存セルコトヲ看取スルナルヘク、簡言スレハソノ書ノ何ントナク西洋臭味ヲ帶ルヲ見ル可シ。ソハ兎モ角、尙具體的ニ洋書ヨリ翻譯シ又ハ西洋思想ノ影響アリト認ムヘキ諸點ヲ擧クレハ左ノ如シ。

(イ) 利明存生中ニソノ門人宇野保定ニヨリテ撰述セフレタル『本多利明先生行狀記』ニ

『和蘭ノ我朝ニ交易トシテ來ルコト數百年、種々ノ珍器諸國ノ產物ヲ持渡リ、西洋ノ書籍ヲ持渡ルトイヘトモ、讀ム者更ニナシ。大通辭吉雄幸作等ノ輩モ書ヲ讀ムト雖、天之數理ヲシラサルユヘニ辯解スルコト能ハス。故ニ無用ノ珍書ト成事年久シ。然ルニ利明先生是ヲ歎息シテ西洋ノ書ヲ披キ、天文算術ノ理ヲ以讀、初テ其理ノ深切ナルコトヲ覺悟シテ西洋ノ天文算術ノ道ヲ開闢シテ門人ニ教フルコト四十年「セイハルト」(我朝ノ)其外ニ數書ノ翻譯ヲナシ」云々

トイヘルコトハ蓋利明讀書ノ範圍ヲ知ルノ一證タルヘシ。

(ロ) 『西域物語』ニ露國女帝ニ「かてりな」ノ言行治蹟ヲ説キ(日本經濟叢書十卷一九〇頁)、或ハ歐洲ノ事情ニ及ヒ(同上三二頁)、英領地名ヲ詳説シ(同上七七頁)、和蘭あむすてゐるだむノコトヲ説ケルカ如キ(同上九四頁)、何

人モ支那書ヨリノ讎案ト見ルコトナカルヘク、政治地理ノ洋書ニ淵源セルコトヲ推知スヘキ也。然レ共此等ノ例證ハ甚タ間接的推斷的ニシテ未タ十分ニ強力ナリトイフ事ヲ得スト雖、「コンパス」ヲ解説シ「ラクタント」其他ノ航海用具ヲ原語ニテ記セルカ如キ(同上)「シカツトカアメル」ナル書籍ノコトヲ説キ(同上)「アモニタチエン」ト題スル書ヲ閱讀セルコト(同上)又「ボイス、シーユ、メル、コンストカピネツト」トイフ書ガ器械製作ヲ圖説セルモノナルコトヲ説ケルカ如キ(同上)或ハ學問ノ原語ヲ示セルガ如キ(同上)何レモ直接ニ洋書閱讀ノ例トナスニ足ルベシ。

(ハ)『本多利明手簡』ニモ種々例證トナスベキモノアリ。開卷第一ニ小宮山楓軒宛書狀ノ一節ニ曰ク

『一、地方書四冊、規矩要法十八冊、チクタント三冊

右之通不殘御寫留被成候段恐悅仕候

一、チランタ海鏡一本、天地球用法記七冊

白川君望ニ付長崎ニ而翻譯出來、其後御退役被遊候ニ付不用ニ相成、其書漂流仕攝州大阪兼直堂方ニ滞留有之、仕合ニ而、私モ漂ヒ參リ暗當仕、心命ヲ籠寫シ取、頗書ニハ候ヘ共御用足シ不申、少シ加治候デムマク用立可申候。

一、西洋諸君政務書一冊。但體書ノママニ候ヘバ追而翻譯出來、俟テ可入貴覽候』

トイヘルガ如キ、又立原梨軒ニ宛テタル書狀ノ中ニ

『此間「セオカラビ」トイフ書ノ内ニふらんす國ノ政事アリ。窮民ノ救金ノ事アリ。日本金ノ勘定チ以テスレハ十五萬兩餘ニ當ルナリ。毎年々々此金子チ天子ヨリ被下國中六ヶ所ニ救籠チ立遣、救助スルコト是歐羅巴自國ノ救金ナリ。外國ニアル領國邦モ此例之通アルベキナレドモ、イマダ其所ニ讀至ル暇ナクレバ妄ニ論ズベキナシ。(中略)何レニモ萬民トモ生涯國君ヘ勤ル者ナレバ老チ寄ルヘキ事モナキ窮民ヘ國君ヨリ養フヘキ筈ニテ指テ譽トモイヒガダシ。壯ニシテ丈夫ナル内ハ上ノ爲メニ勤勞シ

年貢租稅ヲ捧ゲテ上ヲ尊敬シタル者トモナレバ、今老ニ及筋骨弱リ産業ナリ兼ホタテトイヘドモ實チモナク、外ニ寄ルヘキ者モナキハ是非トモニ國君ノ養給フベキ管ニテ則天職也。然ルニ日本ニテ此道ナシ江戸ニテ徘徊スル所ノ窮民は坊主トナリ門戸ニ立テ食ヲ乞者數萬人ナリ。此者トモトモ皆壯ナル時ハ皆泰公チ勤杯シタル者トモニテ皆國用チ勤メタル者ナレドモ今年老ヒテ用ニ不立バ食用ナシ是非ナク門戸ニ立テ食ヲ乞ナリ。云々

トイヘルガ如キハ即チ佛國ニオケル養老救恤ノコトヲ「せをがらび」ナル原書ヨリ知得シ、直チニ之ヲ日本ノ場合ニ推シ及ホシテ論述セルモノニシテ利明ノ思索ノ一斑ヲ例證スルモノトイフベシ。尙翠軒宛書狀ノ内ニモ洋書翻譯ノ例少ナカラス。

『北地ノ事ニ付、色々深キワケ共有之、二十三年以前(天保二年)にらん、(天保二年)ノ部ノ本屋ニテ板行ニ相成候地理書私手ニ入候間翻譯仕掛リ當時大半出來仕候。然ル所常州ヨリ寅卯ニ凡百五十里ニシテまるしやトイフ島ヲ西洋すばんふんトイフ國ヨリ見聞キ、又えさるふ島ヨリ子丑ニ凡二百里ニシテじゆるばんとトイフ大地アリ。是又西洋えんげらんビト云フ大剛國ヨリ見聞キ、又江戸ヨリ丑寅ニ凡四百八十九里ニシテたていすト云フ出崎アリ。是又西洋しべりいと云國ヨリ縣ナ立テタル事アリ。其外周廻ノ島々大抵ハ西洋ヨリ見聞キ縣ヲ建テ土人ヲ撫育スルコト見ユタリ。(右ノ地理書ニ以上ノ記述アリ)萬里ノ波濤チ打越見開クト云フニ、日本ニテハ地續ナル蝦夷ノ土地ヘユクコトヲ異國ヘデモ行事ノ様ニオモフ人氣ノ淺薄ハ笑止ナルコトトモナリ。萬國地名翻譯皆出來仕候ハハ可容入貴覽候』

『先年(しや)本紀ト申書ニ册大本ニテ新渡ノ所、朽木候之御買上ゲ相成、其後前野良澤へ被下候處、良澤死後珍物ニ出候處、俗吏之手ニ入、行簡チ失ヒ居候へ共、此節其吏ヨリ私知人へ翻譯候様ニトノ儀ニ付預リ申候。當時專ラ翻譯仕候間出來次第可入御覽候』

以上(イ、ロ、ハ)三項ニ示セル所ニヨリ利明ノ思想ガ洋學ニ淵源セルコトヲ認ムベク、政治、地理、天文、航海等ノ書籍ヨリソノ知見ヲ擴メ、コレニヨリテソノ意見ヲ立テタルコトノ少カラザルヲ知ル可キ也。

斯クノ如ク余輩ハ當時ニオケル洋學ノ狀態ト利明ノ洋書研究ノ範圍トノ二方面ヨリシテ、利明ノ

思想カ洋學ノ影響ヲ受クルコト少カラサルヲ認メントスルモノナルガ、更ニ當時ニオケル我國ノ政治的經濟的事情ガ國家本位の思想ヲ生スルニ最モ便宜ナル時機ニアリシコトヲ知ルニ及ンテ、一層ソノ信念ヲ強クスルニ至レルモノ也。思フニ歐洲ニ於テめるかんちりずむノ發生スルニ至リシ事情ト、我國當時ノ事情トノ間ニハ、又少カラサル類似ノ事情ヲ存スルカ如シ。抑中世紀ニオケル歐洲各國ハ何レモ封建割據ノ勢ヲ呈シテ未タ統一セル近世の國家ヲ現出スルニ至ラス、然ルニ近世ノ如メニ於テ陸ニあめりか大陸ノ發見アリ、海ニ東印度航路ノ成功アリ、對外發展ノ機熟スルニ及ヒ、先ツ國家ノ内部ヲ統一シソノ力ヲ強大ニシテ以テ外ニ對スルノ必要ナルヲ知り、爰ニ於テカ不完全不統一ナル封建制度ヲ打破シテ中央集權の國家ヲ建テ或ハ關稅制度ノ改革、外國貿易ノ發達、殖民地ノ獲得、貨幣ノ吸收、人口増加ノ必要等ヲ説クニ至リシ也。然ルニ我德川時代ニアリテハ諸侯封建ノ形ヲ存シテ分權不統一ノ觀ナキニアラスト雖、ソノ實質ニ於テハ集權の統一の國家タルニ近ク、殊ニ當時ニアリテハ德川初世ト異リテ國民の統一ハ次第ニ完成セントシ、國家ノ力ヲ大ニシテ外ニ向フノ機運ヲ促シツツアリシニ加ヘテ、歐洲先進國ノ東洋ニ航スルアリ、北邊ノ地ヲ窺フアリ、若シ此際尙退嬰保守ノ政策ヲ維持セハ遂ニ我國ハコレ等諸國ノ爲ニソノ利ヲ制セラレ、ソノ地ヲ奪バレ、我國ハ遂ニ萎靡振ハサルニ至ラン。策ハ開國進取ノ一途アルノミ。是レ天明寛政文化文政ノ頃ニ亘リテ開國論ノ屢唱ヘラルルニ至リシ所以ニシテ、利明がめるかんちりずむの思想ヲ傳フルニ至リシコトモ當時我國ノ事情ニ刺戟セラレタル所頗ル多カリシナラン。

之ヲ要スルニ利明ノ說ハ一方ニ於テ洋學ノ影響ヲ受ケ他方ニ於テハ我國ノ事情ニ應シ時代ノ機運ニ促サレテ生シタルモノ也。而モソノ洋學ノ影響タルヤソノ時代ノ關係ヨリ主トシテめるかんちりずむノ思想ニ支配セラレタル形跡存スルカ如シト雖、又前述ノ如クコレヨリモ一歩進ミタル見解ヲ持セシコトハ大ニ注意セサル可ラサル所ニシテ、徳川時代經濟學者中、利明ハソノ最モ傑出セル一人トシテ數フルコトノ決シテ失當ニ非ルヲ信ズ。

(附言) 本多利明ガ徳川經濟學史上異彩アル一人ナルコトハ内田博士ノ夙ニ唱ヘラルル所ナリ(前掲國家學會雜誌參照)。而シテ余ノ研究亦終始同博士ノ指教ニ資フ所多ク、又戸田博士ハ本稿ヲ通閱セラレ種々有益ナル助言ヲ添クシ、其他同志社龍本教授、大藏省高橋俊氏等ガ種々便宜ヲ與ヘラレタルコトヲ感謝ス。タダ徳川時代經濟思想ノ源流ニシキ龍本教授ト意見ヲ異ニスルニ至リシコトハ頗ル遺憾トスル所ナレトモ、若シ本稿誤テ氏ノ高閣ヲ忝クシ、ソノ指教ヲ仰キ以テ余ノ蒙チ啓クコトヲ得バ望外ノ幸福トスル所也。